

# カーネーションとカランコエの 焼却可能な培養土による鉢花栽培

農業技術研究センター（施設園芸先端技術担当）

キーワード：カーネーション、カランコエ、焼却可能な培養土、ピートモス、ヤシ殻繊維

## 1 技術の特徴

鉢花の培養土には、赤玉土をはじめ、バーミキュライトやパーライトなどの鉱物を含む培養土が広く用いられている。しかし、鉱物をごみとして回収しない自治体が多く、観賞後の培養土を処分できないために鉢花の購入を避ける原因にもなっている（花と暮らしの関わり方に関するアンケート調査：関東農政局）。

そこで、カーネーションとカランコエの鉢花について、焼却可能なヤシ殻繊維にピートモスや食品残渣堆肥を配合した培養土による栽培技術を確立した。慣行で用いられている赤土主体の培養土の代替が可能である。

## 2 技術内容

### （1）焼却可能な培養土による栽培

ヤシ殻繊維にピートモスや食品残渣堆肥を体積比4：1で配合しカーネーションとカランコエを栽培すると、赤玉土、腐葉土、ピートモス、パーライトを体積比4：3：2：1で配合した慣行培養土と比較して開花日、草姿、花蕾数などが同等で生育に差はなく、代替可能である（表1、2）。

### （2）焼却可能な培養土の経費

焼却可能な培養土はヤシ殻繊維にピートモスを配合した培養土では1Lあたり17.1円、食品残渣堆肥を配合した培養土では13.4円となり、赤玉土主体の慣行培養土17.6円/Lと比較してほぼ同額かそれ以下の費用となる（図）。

## 3 具体的データ

表1 焼却可能な培養土がカーネーションの生育に及ぼす影響

培養土	開花日 (月/日)	草丈 (cm)	株幅 (cm)	分枝数 (cm)	花蕾数
慣行培養土	4/17	23.7	27.3	14.5	47.8
ヤシ殻：ピートモス	4/19	26.1	26.3	14.7	55.7
ヤシ殻：食品残渣堆肥	4/19	25.6	25.8	13.6	47.8

※Tukeyの多重検定により1%水準で有意差なし

※品種カンタービレを用い、9月中旬に直径9cmのポリポットへ所定の培養土を用い挿し木をした。10月中旬と12月上旬に摘心し、12月中旬に所定の培養土を用い直径15cmの鉢へ植え付けた。11月中旬から、最低気温13℃で加温した。

※焼却可能な培養土はヤシ殻繊維（ココユーキ）に、無調整ピートモスあるいは食品残渣堆肥（N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=1.5:0.5:1.5、土が良くなる堆肥）を体積比4：1に配合して用いた。赤玉土、腐葉土、ピートモス、パーライトを体積比4:3:2:1に配合したものを慣行培養土とした。

※元肥はオスモコートエグザクトハイ5～6か月タイプ（N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=11:11:18）を1g・L-1混和し、追肥は11月下旬から7日ごとにプロフェッショナルハイポネックス（N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=20:20:20）を1,000倍に希釈し施用した。

表2 焼却可能な培養土がカラシコエの生育に及ぼす影響

培養土	開花日 (月/日)	草丈 (cm)	株幅 (cm)	葉長 (cm)	葉幅 (cm)	花蕾数	葉数
慣行培養土	1/6	9.0	16.3	9.3	5.3	83.3	11.9
ヤシ殻：ピートモス	1/9	8.6	15.8	8.9	5.3	70.8	11.3
ヤシ殻：食品残渣堆肥	1/9	8.8	16.3	9.2	5.5	84.2	10.9

※Tukeyの多重検定により1%水準で有意差なし

※品種パーフェクタオレンジを用い、9月上旬に直径9cmのポリポットへ所定の培養土を用い挿し木を行い、10月中旬に摘心した。11月中旬から、最低気温13℃で加温した。

※培養土は、表1に準じる。

※施肥は、追肥を11月下旬から7日ごとに施用した以外は表1に準じる。

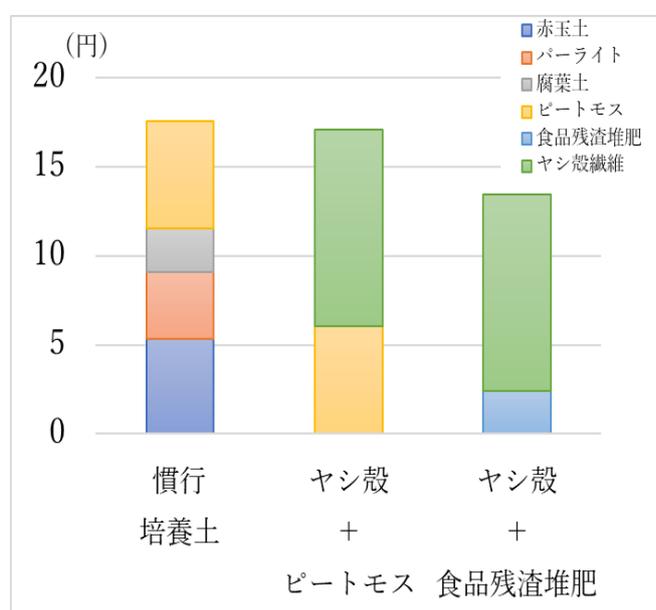


図 培養土1Lあたりの経費（令和6年7月時点）

#### 4 適用地域

県内全域の施設で鉢花や花壇苗を栽培している経営。

#### 5 普及指導上の留意点

- (1) 焼却可能な培養土は赤玉土を主体とした培養土と比較し保水性が高いため、土壌が加湿とならないようかん水量及び回数に留意する必要がある。
- (2) 食品残渣堆肥は原料により組成が異なるため、初めて使用する場合は試験的に使用して生育を確認する。

#### 6 試験課題名（試験期間）、担当

クリーンな培地で棚持ちのよい鉢花栽培技術の確立（2021～2023）、施設園芸先端技術担当